

“全ての子どもたちが、自分らしく笑顔で成長する。”を理念に、特別な支援が必要な児童が自分にあった学びに取り組める教材開発と、児童一人ひとりが今の学びを自分の将来に繋げられるキャリア教育教材開発を事業の2つの柱として、各分野の専門家、教育者、医師、教材出版社が連携して活動をしています。
ここでは、事業内容に沿った教育課題をテーマに開催している、年に2回のセミナーを紙面でご紹介します。

*株式会社光文書院は、NPO法人スマイル・プラネットのメインサポーターです。

教育セミナー報告

第5回 コミュニケーションが苦手な児童への対応と支援 (講演 & シンポジウム)



通常学級における 特別支援教育のあり方

立教大学 現代心理学教授 大石 幸二

全ての子どもたちが教育的ニーズをもっていて、その中の一部の児童は、個に応じたきめ細かな手立てを尽くすことによって、よりよく伸びることが出来ます。そのときに、一人ひとりの課題を本人に少し意識化してあげたほうがよいと思います。先生が言語化されたら、支援の質が高まります。

また、先生方が目、こころ見とっている児童の姿勢や体の動かし方、目の動き方、聞くときの構えや呼吸がどうかということはいへん大きな意味をもちます。一人ひとりの子どもたちの特質を理解すると、それを元にして子どもたちの動きが全体として把握されて、何を仕掛ければどういう結果が現れるかということ、予測できるようになってくるからです。

いわゆる行動上の問題は、コミュニケーション不足によって生じると言われています。児童が先生や友達に受け入れられたい承認されたいする場の中に置かれることで、行動上の問題が減弱するということも分かっています。行動上の問題がエスカレートしてしまう場合、子どもたちがコミュニケーションから遠ざけられていることがあるかもしれないと思っています。

特別支援の視点は、全ての子どもたちを大切にするという教育を大きく転換する契機になるのですが、そのためには、もっと先生方一人ひとりのよい実践が意味づけられて評価され、やっていることの価値に気づけるように、それらが学校全体で共有されている必要があると思います。

コミュニケーションの苦手な 児童への読み書き支援

東京学芸大学 特別支援教授 小池 敏英

読み書きが困難な児童には、長い単語を読み詰まる、特殊音節の単語を読み詰まる、そして漢字単語が読めないという三つの課題が見られます。当然こういう児童には、学習性無力感が起き、いくら努力してもできないということで、生活全体に力が入らない様子も伺い知ることが出来ます。

文章中に出てくる単語を目になじんだ状態にすれば、その文章は読みやすくなります。具体的トレーニングは「言葉探し」です。教科書に出てくる「単語」を無意味語の羅列の中から探すという課題や、その言葉の「穴埋め(単語完成)クイズ」をすることです。同様に漢字も、言葉探しや穴埋めクイズで、改善の様子が見られてきます。

スマイル・プラネットでは、教科書準拠の「スマイル式ブレ漢字プリント」をウェブサイトで提供しています。光村図書と東京書籍に対応しています。学年・単元を選ぶと、その単元で学習する言葉探しや穴埋めクイズ等のプリントを出力することが出来ます。自動生成しているので、繰り返し出力しても提出される漢字の位置が替わり、また新たな課題になります。これを行うと、単語になじんでくるので、その単語が入っている文章は読みやすくなります。これを一週間に三回やり、それを三週間実施すると、できるようになったという実感が出てくると思います。児童にとってこのトレーニングは、文章を読むトレーニングよりずっと楽ですので、この「単語を読む」トレーニングは有効だと思っています。

対人認知の弱さをもつ 児童に対する支援

東京学芸大学 特別支援教授 藤野 博

自閉症スペクトラム(ASD)には、基本的な認知に特徴があるという研究があります。それは、「実行機能の問題」・「中枢統合の弱さ」・「心の理論の障害」の三つです。実行機能というのは、行動を計画することの問題、中枢統合というのは、細かいところには目がいくが、全体を包括的に捉えるのが難しいという問題、心の理論というのは、相手の気持ちや感情、視点を理解することが難しいという問題です。

それぞれの特徴に対して支援のポイントがあります。実行機能に対しては、活動の流れに対する見通しがもてるように援助することです。中枢統合に対しては、生活環境や学習環境をシンプルにすることです。心の理論に対しては、目に見えないものを視覚化してあげることです。

目に見えないものを視覚化する際の、具体的な手法を二つ紹介します。一つは「ソーシャルストーリー」として、社会的場面を簡単なお話にして説明してあげるといいます。もう一つは「コミック会話」として、起こった状況を吹き出しの会話形式にして、客観的に図解(絵入りで示すなど)をして考えさせるというものです。

いずれの支援をする場合も、先生と児童のコミュニケーションが大事です。また、対人認知に困難を抱える子どもへのサポートが日常的に提供される環境づくりも、とても大切です。

学校では、支援を必要とする児童が多く認知され、そのニーズも多様になり、さらに、ベテラン先生の退職などの課題があります。そんな中で先生方は日々、「気になる児童」の支援をされていますが、一人ひとりの先生によって気になり方や気になり始める時期が違ってきます。そのあたりは整理して対応していく必要があると思います。まず、深刻さの度合を一〜三の段階に分けてみることに。もう一つは、児童の見方について領域を分けて捉えることです。例えば、「学習面」「心理社会面」「進路面」「健康面」の四領域に分類する方法です。このように整理して分析的に捉え、校内で目線をそろえて共通理解していくと、チームとしての援助に有効だと思います。

キャリア・カウンセリングはカウンセリングの一つですが、治療的なアプローチではなく、より開発的に将来の目標設定につながることや、目標達成の障壁の克服などの視点に目を向け、解決思考で児童に関われるのがよいと思います。

ニーズのある児童に育みたい力を整理してみました。まず自己理解をして、自分の強みを使っていけるようにする。それから、自分に役立つ自助資源の理解をする。そして将来的には自分で自分を助けることができるようになる。そうした力を育むことで、何卒になっても成長し続ける人間を世の中に送り出せます。小学校でのキャリア・カウンセリングを踏まえた関わりは、その基盤になってくると思います。

シンポジウム

セミナーのテーマは、「コミュニケーション」に課題もつ児童が、生き生きと学校生活を送るための対応と支援」ということで、4人の講師の先生からお話を伺いました。このシンポジウムでは、さらに内容を深めていきました。

現状で、先生の専門性を高めるためにどのような手法が考えられますか？

先生方の指導行動が変わらなければならぬと考えています。その際の留意点として、新しい技法やアイデアを取り入れるのではなく、現時点で先生方がうまくできているけれど自覚していない、成功的な実践なのに本人が認識していない「既存のスキル」を発掘し、それを補強・広めることが最も大切だと考えています。

もう一つ重要なことはフィードバックです。実践者の振り返りに準拠しながら、フィードバックを言語化するということです。



大石 幸二

子どもたちの「気になること」を受け止めるツールはありますか？

クラスの気になることを短冊に書き出して、それを領域に分けてチェック表を作ります。縦軸はクラスの児童、横軸に領域別に気になること、表です。これを複数の先生(担任+1名程度)

で年間に三回くらい実施します。慣れてくると一クラス分やるのに十分程度でできます。前回は数がゼロだった児童のチェックが、今回は二人の先生とも三や四になっていたりと、その児童には何か変化があったということですね。そういう児童には放課後等に優先的に声かけすると、効果的支援になる可能性が高いです。



西山 久子

ワーキングメモリに課題のある児童は、どう支援すればよいですか？

ワーキングメモリの弱い児童は、型通りの反復しても定着しにくいものです。効果が見込める手法は、「自分の知っていることと関係つけて学習させる」という方法です。また、児童が知っていることの代表的なものに絵です。その人の知っている知識を利用して絵を理解しませう。ですから、単語の意味を表す絵と合わせて学習をすると、その単語の定着に効果があります。



小池 敏英

「心の理論」のアセスメント(評価)と、その獲得条件を教えてください。

「心の理論課題」という概念を取り入れて、東京学芸大学が作成したアセスメントソフトウェアがあります。これを用いると、設定した五つの課題を元に、その子が心の理論をど

のくらい理解できているかを評価することができます。また、どのような条件が心の理論の獲得を可能にするかという点、決め手は「言語力」だということが分かってきました。九才くらいの言語力があると、こういった心の理論の課題は解けるようになってきます。大人のASDの方には知的な仕事をされている人もいますが、本や小説でいるんな心の機微を学んだと仰います。そんなことから、読書体験が効果的だということになります。



藤野 博

まとめにかえて

学校現場では、教職年数の若い先生方が増えていきます。このようなときだからこそ、既に行われている指導を模倣するだけでなく、一つ一つの意味を考え、新たな状況や体制に適したものを見いだすことを心がけてほしいのです。「宿題」一つをとっても、全ての子どもに同じ内容で同じ量を求めることが適切な指導なのか、というように、考えるべきことがたくさんありそうです。

シンポジウム司会
コーディネーター



渡辺 秀貴

東京都狛江市立
狛江第三小学校 校長
東京都立学校情緒障害
教育研究会 会長